

# ずいひつ No.89

2013年8月25日発行

## 三浦しをんの本棚が見たい

三浦しをんの肩書きは作家だ。2006年には直木賞を、2012年には本屋大賞を受賞した。しかし「え、そうなの？」と言う人もいるだろう。もしかすると「誰それ？」と言う人もいるかもしれない。けれど「三浦しをん」という名前を知らない人の中にも、『風が強く吹いている』(913.6/292)や『まほろ駅前多田便利軒』(913.6/291)『舟を編む』(913.6/Mi)など、映像化された作品の名前を知っている人は大勢いるのではないだろうか。

私が初めて読んだ作品は『白いへび眠る島』だったと思う。友人に薦められたのだ。その後も著作を次々と読んだ。図書館で借りた本もあるけれど、読みたい衝動に駆られる本は、自分で購入したいと考えている私は、三浦しをんの本も何冊か部屋の本棚に並べてある。ただ、彼女の著作で並んでいるのは小説ばかりではない。

三浦しをんの肩書きは作家だが、私は特に彼女の書くエッセイや書評が好きだ。小説を読んでいる時よりも、エッセイや書評を読んでいる時にしみじみと思う。三浦しをんは作家だ、と。三浦しをんのエッセイと言うと、私生活を赤裸々(赤裸々という言葉は彼女にこそ相応しいと思う)に綴っているものが有名だと思うが、本や伝統文芸について語っているエッセイ(『三四郎はそれから門を出た』『あやつられ文楽鑑賞』など)は三浦しをんの真骨頂だと思う。取り上げている作品への愛が文章から滲み出ている、読者が少し引くぐらい深く作品を掘り下げている。どの作品も同じように掘り下げているのに、同じ様な表現にはなっていない。一つ一つに比喻が多く用いられていて、語りが上手いのだ。書評もそうだ。「評価」していると言うよりも「この作品のここが好きだ!」と主張している。その主張に笑ってしまう時もある、琴線に触れる時もある。読んでみたいと思わせられている。

「BL」という言葉をご存じだろうか。三浦しをんを語る上で外せない言葉なのだが、略さずに言うと「ボーイズラブ」、男性同士の恋愛小説及びマンガの総称だ。最近では書店で平積みされていたり、少女マンガと同じ雑誌で連載されていたり、出版情報誌にカラー表紙入りで紹介されていたりする。三浦しをんは「生きていく上でBLは欠かせない」と豪語して憚らない。

数年前、某雑誌に「このBL作品に芥川賞を!」という特集が掲載されていた。選者にはもちろん、三浦しをんもいた。その特集記事で「芥川賞を獲らせたい作品No.1」に選ばれた小説、『箱の中』(木原音瀬・著)は、2012年に大手出版社から文庫で再出版されている。

三浦しをんの読書は幅広い。ジャンルを超え、時代を超え、国を超えて本を選び読書をしている人だ。「読書は趣味じゃない。本を読むことは生きることと同じこと」と言い切るだけのことはある。地震で山積みの本が布団の上に崩れてきても「痛いけど、なんか暖かくていいかも…」と前向きに捉える三浦しをんの部屋には、きっと大きな本棚があるはずだ(本を売ったり捨てたりしないから)。そして本棚に入りきらない本を山積みしているはず。ジャンル別でも、著者別でも、好きな順でも、前面の背表紙全てが、BL本であったってかまわない。どんな風に並べられていてもいいから、その本棚と山積みにしてある本を見てみたい。そして1冊ずつ感想を聞かせてもらいたい。きっと今まで私が見てきた、幾多の垂涎本に出会えるだろう。

